9 守れ！チャンピオンベルト

高志がはじめてボクシングを知ったのは、中学時代だ。テレビで辰吉丈一郎せん手の試合を見た時に思った。「あんなふうに強くなりたい。」と。

その後、高志はまよわずボクシングの強い高校に入学した。始めのころは、一か月間ずっと基本となる「かまえ」や「ジャブ」（うでだけで小きざみに相手の顔などを打つ）だけというような練習だったが、高志はつまらないと思ったことは一度もなかった。

高校三年生の時、はじめての全国大会（なみはや国体・少年の部）でじゅん優勝をはたした。

でも、高志は高校時代をこうふり返る。

「どの試合も判定（時間内に勝敗がつかない場合、しんぱん員が点数などで勝敗を決めること）でぎりぎり勝ち上がっただけ。それほどパンチ力もないし、うまくもない。目立ったものが何もないせん手だった……。」

大学でもボクシング部に入った。同級生は一流のせん手ばかり。高志はほけつにさえもなれず、「内山、内山」とよばれ、先ぱいどころか同級生の荷物運びをしなければならなかった。それでも、高志はボクシングをやめなかった。「負けたくない。どうすれば勝てるのか。」そればかり考え、毎日、練習に明けくれた。そして、二年生の時、強かった先ぱいとの試合に勝つことができた。「おれでも、やればできる！」なみだが止まらなかった。

大学四年から、全日本せん手けんを三れんぱ。夢は「アテネオリンピック出場」にむいた。

だが、予せんであと一つ勝てば出場が決まるという試合で負けた。高志の夢はもえつきた。

その年、プロのさそいもことわり、高志はサラリーマンとなる。仕事の合間に、プロになった同級生や後はいの試合をおうえんしに行った。リング上の仲間のすがたはとてもまぶしく見えた。「がんばっているな。おれは本当に今のままでいいのか……。」高志は、自分の心に問いかけた。

高志は病気の父をせっとくしつづけ、二十五才の時、プロデビューした。デビューして三せん目をむかえるころ、父はしずかに息を引きとった。父とのやくそくは、世界チャンピオンになること。

「もう、後へは引けない。絶対に世界チャンピオンになる。」

十キロ走、坂道や階段でのダッシュ。高志は集中力を高めて練習し、試合のチャンスを待った。

五年後の一月、高志はついに、そのこしにチャンピオンベルトをまいた。

「お父さん、やくそく、はたしたよ。」

高志のとう志はさらにもえる。その理由は一つ。「ボクシングが好きだから。」

高志は、今日も練習へとむかう。世界の王座を守りぬこうと。

◆◆◆

内山高志さんは、スーパーフェザー級のプロボクサー。「ノックアウト・ダイナマイト」とよばれる強力なパンチ力の持ち主です。

内山選手は、一九七九年長崎県生まれ。幼少期から春日部市に住み、市内の小・中学校に通いました。

二〇〇五年にプロデビュー。二〇一〇年には、日本人初のWBAアジア最優秀選手賞を受賞、さらに、春日部市民栄誉賞（第二号）を受賞し、「かすかべ親善大使」に任命されました。